

## 「門」論

## ——〈和合同棲〉の行方——

木村 功

1

〈着眼の仕方一つで、この作品はどのようにも理解できてくるようにみえる〉<sup>①</sup>という畑有三の指摘にもあるように、「門」は平明な作品のようであり、少し立ち入ると、なかなか複雑な、作意のつかみにくい作品である。<sup>②</sup>例えば宗助と御米の夫婦関係については大きく二つの主張が認められるが、一つは〈和合同棲〉（二三の五）の関係を認める見解であり、もう一つは逆に（二人の人間関係の裂け目）（西垣勤）を認める意見なのである。前者には早くから、〈其の恋は（略）相当の分別ある人が、姦通の大罪を犯して迄も之を得なければ生きて居られない程、必要な恋である。之を得た宗助とお米とは我々から見ると遙に幸福な羨しい身の上と云はなければならぬ〉<sup>③</sup>という谷崎潤一郎の指摘がある。江藤淳は

（しみじみとした夫婦の愛情<sup>④</sup>）を読み取り、内田道雄も（このように、ましやかな宗助、御米の交歓は、僕にはそれ自体見事に完結した、いわば「息詰るような明るさ」の世界だと思ふのだ。）<sup>⑤</sup>と述べている。一方、後者では、西垣勤が（この二人の姿は、自分の苦悩を相手に打ち明けるのは相手にとって無用なこと、いたずらに苦しませることにしかならない、という種の愛につつまれているのは言うまでもないがそれ以上を出るものではない。この二人の愛はそのレベルでの愛に変わっていつている、すでに裂け目が入って来ざるをえなくなっているという限定を付さなければならぬだろう。）<sup>⑥</sup>と指摘する。近年でも石原千秋は、（この夫婦にあつては、交わりは言葉や表情に顕在化され、拒否は非言語的<sup>インバルク、ミュテシコ</sup>交通や沈黙の底に押し隠されているのである。宗助の姿勢も御米の微笑も、そのようなダブル・バインドの表現なのだ。）<sup>⑦</sup>としている。しかしまた余吾

育信は、「門」の語りが（宗助と御米を「夫婦」として一括して語り出すことが多い。宗助も御米も〈個〉／差異として示されるのではなく、〈対〉／同一性として読者に提示されるのである。《語り》のこの志向性は終始変わることなくテクストを貫いている。⑧）と、依然二人の結び付きを認めている。このように宗助と御米の関係の内実については、いまだに定説が存在しない現状と言えよう。

本論では、宗助と御米の夫婦関係の内実を闡明することを目的とし、併せてその関係を規定する「門」の語りの問題についても言及したい。

## 2

「門」で物語られる宗助と御米の関係を検討する場合、物語の構成要素の一つである時間に留意する必要があるだろう。すなわち「門」の世界を、今現在の時間と〈昔〉の時間という二つの時間軸が貫いていることである。なかでも〈昔〉が物語られるのは第四章に始まり、第三章と第四章、第七章が上げられる。とりわけ夫婦の過去に関する章段として、第三章と第四章は詳細に物語られる。この点からも〈昔〉の時間は、「門」の物語の構成上大きな意味を持っている時間であると考えられよう。しかし〈昔〉の時間に着目するのはそれだけの理由からではない。以下用例は一部に

とどめるが、この時間軸を物語る語り手が宗助だけの〈昔〉を物語る場合はともかく、御米が登場してきてからは、宗助と御米を目して〈夫婦〉（二人）〈彼等〉という呼称で括り出していることに注目したい。

・二人の間には諦めとか、忍耐とか云ふものが断えず動いてゐたが、未来とか希望と云ふもの、影は殆んど射さない様に見えた。彼等は余り多く過去を語らなかつた。時としては申し合はせた様に、それを回避する風さへあつた。（略）

彼等は自業自得で、彼等の未来を塗抹した。だから歩いてゐる先の方には、花やかな色彩を認める事が出来ないものと諦らめて、たゞ二人手を携えて行く氣になつた。（四の五）

・彼等は、日常の必要品を供給する以上の意味に於て、社会の存在を殆んど認めてゐなかつた。彼等に取つて絶対に必要なものは御互丈で、其御互丈が、彼等にはまた充分であつた。彼等は山の中にゐる心を抱いて、都会に住んでゐた。

（略）彼等の生活は広さを失なふと同時に、深さを増して来た。（略）彼等の命は、いつの間にか互の底に迄食ひ入つた。二人は世間から見れば依然として二人であつた。けれども互から云へば、道義上切り離す事の出来ない、一つの有機体になつた。二人の精神を組み立てる神経系は、最後の繊維に至る迄、互に抱き合つて出

来上がつてゐた。(一四の一)(傍線引用者)

語り手が宗助と御米の固有名詞を用いることよりも、二人をワンセットで括りだす呼称を多く選ぶことにより、宗助と御米が〈昔〉

あるいは〈罪〉意識に基づく親密な共生関係を結んでいることが浮かび上がってくる。とりわけ二人の精神を組み立てる神経系は、最後の織維に至る迄、互に抱き合つて出来上がつてゐた。』という一文は、安井への〈罪〉意識に基づいた宗助と御米の強固な結び付きを示す表現と言えよう。以上から、語り手が〈昔〉もしくは〈昔〉から現在に到るまでの回想時間を物語る場合は、二人〈彼等〉という呼称を多く用いることで、宗助と御米の〈夫婦は和合同棲といふ点に於て、人並以上に成功した〉(一三の五)関係を物語つていふことが明らかになった。

それではもう一方の、現在の夫婦関係はどうであろうか。こちらの関係を検討するにあたっては、二人に介在し二人の価値観をあまり出す人物や物などを考察の指標としたい。その第一は小六である。小六は学資問題を抱えて佐伯家と宗助の家を往復し、宗助は兄として弟の学資問題を解決しなければならぬ立場にある。「門」の物語は、この小六の移動によって展開していく。

・此青年は、至つて凝り性の神経質で、斯うと思ふと何所迄も進んで来る所が、書生時代の宗助によく似てゐる代りに、不図気が変

ると、昨日の事は丸で忘れた様に引つ繰り返つて、けろりとした顔をしてゐる。其所も兄弟丈あつて、昔の宗助に其儘である。

(略)

宗助は弟を見るたびに、昔の自分が再び蘇生して、自分の眼の前に活動してゐる様な気がしてならなかつた。時には、はらはらする事もあつた。又苦々しく思ふ折もあつた。さう云ふ場合には、心のうちに、当時の自分が一図に振舞つた苦い記憶を、出来る丈屢呼び起させるために、とくに天が小六を自分の目の前に据ゑ付けるのではなからうかと思つた。さうして非常に恐ろしくなつた。

(四の二)(傍線引用者)

今まで殆ど生活を共にすることのなかつた弟が垣間見せる言動に、宗助はかつての自分の言動との類似を認めている。そしてそれは宗助にとつて〈昔の自分が再び蘇生〉することであり、恐怖を覚える程に現在の宗助を脅かすのである。

一方、御米にとつての小六の意味については、すでに前田愛に卓見がある。前田は〈中心に茶の間があり、宗助・御米・下女の部屋が三方に分肢しているという安定した居住空間の構造は、宗助夫婦の〈いま〉と〈ここ〉を見えないところで支えている。〉とし、〈ここ〉の安定した構造は、学資の供給を絶たれた小六の同居をきっかけに軋みはじめる。六畳の居間を小六に譲りわたした御米は、

自分の居場所を失った」と述べた。さらに前田は、(御米の居間)が今までの生活の(負の痕跡があつめられてゐる) (もつとも深い翳を淀ませている場所) であるとしている。したがつて(小六の同居は、宗助夫婦の家にたたみこまれていたこの無意識の領域への侵犯)であるという意味づけた。

しかし説得的な前田の指摘も、宗助夫婦对小六という図式に束縛されて、宗助と御米の生活時間の差異にまでは言及できていない。というのも、宗助が崖下の家で過ごす時間は帰宅後と日曜日の時間だけであり、御米が家で過ごす時間と比べると格段に少ないのである。言い換えれば宗助よりも御米の方が、家と深く関わつた生活を送つてるといえよう。宗助の生活が役所中心に営まれてゐるよう、主婦である御米のそれは家を中心なのである。この意味で小六が侵犯したのは、夫婦の領域というよりもむしろ御米の領域と解した方がより正確であろう。宗助が日中在宅することがないのに書斎を持ち続け、下女の清でさえ自分の部屋を所有しているのに対し、四六時中在宅する主婦である御米が自分の占有する空間を失つてしまふ事の意味は軽視できない。

御米は又頭が重いと云つて、火鉢の縁に倚りかゝつて、何をすゝるのも懶さうに見えた。斯んな時に六畳が空いてゐれば、朝からでも引込む場所があるのと思ふと、宗助は小六に六畳を宛てて

つた事が、間接に御米の避難場を取り上げたと同じ結果に陥るので、ことに濟まない様な気がした。(九の四) (傍線引用者)

小六の存在は、御米の生活を空間的に圧迫するだけに留まらない。避ければ小六が寮を引き払う前の夫婦の会話で、宗助が(丁度此方が迷惑を感じる通り、向ふでも窮屈を感じる訳だから。おれだつて、小六が来ないとすれば、今のうち思ひ切つて外套を作る丈の勇気があるんだけれども)と述べてゐるのに対し、語り手は(宗助は男丈に思ひ切つて斯う云つて仕舞つた。けれども是丈では御米の心を尽くしてゐなかつた)。(六の二)と、小六を介在させた夫婦の間に横たわる意識の懸隔を明示したのである。それでなくとも(御米には、自分が初めから小六に嫌はれてゐると云ふ自覚があつた。それでも夫の弟だと思ふので、成るべくは反を合せて、少しでも近づける様に／＼と、今日迄仕向けて来た)。(同)という経緯がある。小六に対する御米の感情の内実を宗助は十分認識してゐるとはいえないのであり、この点での夫婦の懸隔は軽視できない。

以上の考察から宗助における小六の意味としては、過去の宗助の姿を(蘇生)させ現在の宗助に脅威を与える存在としての意味が認められる。一方御米にとつては、彼女固有の生活空間の侵犯者であるばかりでなく、彼女を精神的にも圧迫する存在なのである。このように小六の同居は、宗助と御米のそれぞれに固有の内面世界を浮

かびがらせるとともに、その意識の懸隔を讀者に示している。

この小六の同居は、物語の次の展開を促している。学資問題と野中家の家産処分の問題について佐伯の叔母を訪ねた折に、宗助は酒井抱一の屏風を見いだす。抱一の屏風の機能については、吉川豊子に「それは既に失われた、世界と宗助との親愛関係を象徴する、宗助父子の失われた親愛関係の思いが籠められている」とする指摘があり、「屏風は、宗助にとって、彼が社会的な罪を犯す前の生活の象徴である。」とする牧野陽子の見解が続く。次いで屏風の満月のイメージに着目した勝田和学は、「抱一の屏風はその満月の絵柄が象徴的に示すように、かつての野中家の栄華、宗助の失われた至福の時間を蘇らせるものである。」としている。三者の見解に共通するように、屏風は「昔」の平穏な時間を包蔵するものである。小六によって「昔」の自分が「蘇生」した宗助は、その小六の学資問題に導かれて、佐伯の家で野中家所有の骨董、いくなれば「昔」の断片を見いだす。

父は正月になると、屹度此屏風を薄暗い蔵の中から出して、玄関の仕切りに立てて、其前へ紫檀の角な名刺入れを置いて、年賀を受けたものである。其時は目出度からと云ふので、客間の床には必ず虎の双幅を懸けた。(四の一)

宗助の脳裡には屏風を契機にして、野中家の正月風景という

「昔」の時間が現出する。しかし宗助に意味的な屏風も、御米にとは「斯んなものを珍重する人の気が知れないと云ふ様な見えをした。」(六の三)とあるように場塞ぎで邪魔な骨董に過ぎず、それは適当な価さえ付けば金銭に代替し、生活の不足物資を補うべき品なのである。そういう御米に宗助は、「けれども親から伝はつた抱一の屏風を一方に置いて、片方に新しい靴及び新しい銘仙を並べて考へて見ると、此二つを交換する事が如何にも突飛で且滑稽であつた。」(六の五)と売却に抵抗を示す。石原千秋も、「この屏風は宗助にとってかけがえのない一つの《家》の記憶であつた。」とし、その一方で「御米は屏風売却の発案者として、自ら知らずに内部から《家》をこわす力を働かせていたのである。」と把握しているように、屏風を間に置いた宗助と御米の意識のベクトルは交わることのない志向性を示している。したがってここに、「門」における屏風の果たす機能が認められよう。すなわち屏風によって宗助の意識はさらに「昔」の引力にとられ、御米はそういう宗助の心情を理解することなくただ夫への遠慮から慎ましく口を閉ざすだけなのである。宗助の家の正月を知らない御米は今ある屏風の姿を評価するしかないのであり、それも結局は今現在の生活のために古道具屋との交渉へと発展していく程度の理解なのであった。このように屏風も、夫婦の意識の懸隔を讀者に示しているのである。

やがて古道具屋に売却された屏風は、家主の坂井によって買い取られ、泥棒の一件に始まった宗助と坂井の交際が濃やかになるのを助長する。この坂井との交流によって（宗助は此楽天家の前では、よく自分の過去を忘れる事があつた。さうして時によると、自分がもし順当に發展して来たら、斯んな人物になりはしなかつたらうかと考へた）（一六の二）りするのであつた。坂井との交際も宗助自身が振り捨てた（昔）を追想させ、有り得たも知れない人生を夢想させている。そしてそれは安井をめぐる御米との（昔）へも、きわどく遡及していくことに他ならない。そのためか坂井の家には、屏風や子供、頭髮を真ん中から奇麗に左右に分けた織屋（安井を暗示）など、宗助と御米の（昔）に関わる象徴が集まっているのである。年が明けてから坂井が安井の到来を告げることも考慮すると、坂井は宗助の今と（昔）を結び付ける、その名の通り今と（昔）の境（サカイ）の役割を果たしているといえよう。その中でも坂井の子供達によって、宗助と御米は（昔）失つた自分達の子供を想起させられるのである。

夫婦の話はそれから、（略）仕舞に其家庭の如何にも陽気で、賑やかな模様で落ちて行つた。宗助は其時突然語調を更へて、「何金があるばかりぢやない。一つは子供が多いからさ。子供さへあれば、大抵貧乏な家でも陽気になるものだ」と御米を覚した。

其云ひ方が、自分達の淋しい生涯を、多少自ら窘める様な苦い調子を、御米の耳に伝へたので、御米は覚えず膝の上の反物から手を放して夫の顔を見た。（二三の三）

坂井の子供達の（略）騒ぐ声が、能く聞えると、御米は何時でも、果敢ない様な恨めしい様な心持になつた。（五の一）とあるように、（御米には自分と子供とを連想して考へる程辛い事はなかつたのである）（同）。宗助の不用意な発言は、御米を深く傷つける。このエピソードも、多くの論者が指摘するように御米に対する宗助の意識の懸隔を示す指標にはかならない。このように坂井との交流は、宗助と御米の（子供）をめぐる意識の懸隔、ひいては宗助の御米に対する配慮の希薄さを如実に顕在化させることになる。

そればかりではない。交誼を重ね、年が改まつた正月七日、宗助は坂井の口から安井の到来を告げられるが、それを御米に秘匿することで自ら関係の懸隔を拡げていくのである。

このように小六↓抱一の屏風↓坂井（子供）↓安井という経緯を辿りながら、現在の宗助夫婦の關係の空隙が読者に漸次提示されていた。宗助御米夫婦の（昔）を回想して語る語り手が（和合同棲）の關係を物語るのに対し、この夫婦の現在を物語る語り手は夫婦の懸隔を物語つているといえよう。明らかに志向性の異なるこの二つの語り手を、便宜的に「過去の語り手」と「現在の語り手」と呼ん

でおくが、「門」はこのような相反する語りを複合せ、作品世界を生成していくテキストであるといえよう。

更にいえば、読者は作品世界の時間進行を読み取りながら、いつの間にか宗助と御米を結び付けた運命の始源へ逢着する。この意味においては、「門」は今現在の時間の進行と共に〈昔〉の時間が順次手操り寄せられ蘇生してくる、逆比例する時間経過の二重構造を蔵しているといえる。時間軸と語り手を複合せせることで作品世界は重層化し、登場人物の形象も陰翳の度を増すわけである。

## 3

宗助御米夫婦の過去の秘密が明らかになった時点で「門」が終結しないことは、物語の主題が夫婦の秘密の開示というよりも、夫婦関係を宗助と御米が〈昔〉と今現在を通してどのように生きているのか物語ることにあるからだと思われる。前節までの考察で〈昔〉は〈和合同棲〉の関係を生きていた夫婦に、現在は空隙が生じている事が明らかになったが、以降その関係の変化を二人がどのように生きているのかを検証していきたい。

御米のぶら／＼し出したのは、秋も半ば過ぎて、紅葉の赤黒く縮れる頃であった。京都に居た時分は別として、広島でも福岡でも、あまり健康な月日を送った経験のない御米は、此点に掛ける

と、東京へ帰つてからも、矢張り仕合せとは云へなかつた。(一の一)

この御米の病気は、宗助御米の関係に生じている懸隔の指標である小六・屏風・坂井（子供）の叙述の後に続いている。御米の病気は二人の関係に生じた懸隔に対して、どのような意味を持つのであろうか。

御米が病に倒れた夜、宗助は医者を呼び小六と共に看病に当たる。翌日役所に出ても〈自然御米の病気が氣に罹る〉(一二の一)ので早退し、薬のために眠り続ける御米を案じるのである。やがて御米は無事に回復し、宗助は安堵する。

(略) 宗助は、蘇生つた様にはつきりした妻の姿を見て、恐ろしい悲劇が一步遠退いた時の如くに、胸を撫で卸した。然し其悲劇が又何時如何なる形で、自分の家族を捕へに来るか分らないと云ふ、ぼんやりした掛念が、折々彼の頭のなかに霧となつて懸かつた。(二三の一)(傍線引用者)

このように病気は宗助の御米に対する配慮を浮かび上がらせ、一見二人の揺るぎない関係を読者に印象づけるようではある。しかし宗助には、〈悲劇〉への〈ぼんやりした懸念〉が生じており、それは御米の全く与り知らぬ所で不安を形成していくのである。御米が病気を経て平常に復したのに対し、宗助は御米の病気を経て、逆に

平常を失つたのだとも言えよう。それは散髪を終えて坂井を訪問した宗助が、その場にいた髪の毛が（頭の真中で立派に左右に分かれてゐる）（二三の三）織屋から銘仙を買ひ求めて御米を喜ばせたはずが、坂井の家庭の話題から二人にはタブーである子供のことを、前節のように口走つてしまふからである。

宗助の発言は御米の感情をいたく刺激し、ついには以下のような御米の告白を導くことになる。ここで語り手は、御米が告白したこととそうしなかつたことを、周到に読者に示し懸隔を読み取らせようとしている。

御米の夫に打ち明けると云つたのは、固より二人の共有してゐた事実に就てではなかつた。彼女は三度目の胎児を失つた時、夫から其折の模様を聞いて、如何にも自分が残酷な母であるかの如く感じた。自分が手を下した覚がないにせよ、考へ様によつては、自分と生を与へたものの生を奪ふために、暗闇と明海の途中に待ち受けて、これを絞殺したと同じ事であつたからである。斯う解釈した時、御米は恐ろしい罪を犯した悪人と己を見做さない訳に行かなかつた。さうして思はざる徳義上の呵責を人知れず受けた。しかも其呵責を分つて、共に苦しんで呉れるものは世界中に一人もなかつた。御米は夫にさへ此苦しみを語らなかつたのである。

（二三の七）（傍線引用者）

御米が宗助に告げたのは（徳義上の呵責）ではなく、（貴方は人に対して済まない事をした覚がある。其罪が崇つてゐるから、子供は決して育たない）という（易者の判断）（二三の八）の方であつた。御米は易者の言葉によつて、流産の背景に（人に対して済まない事をした）過去の（罪）を見て取らされ、この判断を受け入れることで御米固有の（徳義上の呵責）の問題を夫婦の問題として捉え直し、宗助に打ち明けるのである。言い換えれば、御米は易者の言葉を発条にして自らに原因する死産の（罪）の問題を、宗助と共有する（昔）の（罪）へ置き換えたのである。それではなぜ御米は、死産の問題を（昔）の（罪）の問題と結び付けて解釈しようとするのか、という疑問が生じよう。

宗助の口から子供の話を聞くのは、御米にとつて三度も子をなしえなかつた自分の負い目を突き付けられることである。宗助がそのような発言をするのは、子供の死産の問題を夫婦としては勿論自分の問題としても認識していないからである。〈是でも元は子供が有つたんだがね〉と、さも自分で自分の言葉を味はつてゐる風に付け足して、生温い眼を挙げて細君を見た。御米はびたりと黙つて仕舞つた。（三の三）という場面にも窺えるように、宗助には子供の問題について御米に配慮する姿勢が認められない。御米の微妙な心情も宗助には通じていないのである。子供の問題について宗助との意



思の疎通が出来ていない御米にとって、〈昔〉の〈罪〉を提示する易者の発言は、宗助も子供の問題に無関係ではないことを教えてくれたのであり、それは御米にとって宗助への負い目を解消する契機となったのである。子供が出来ない責任は、御米だけではなく宗助にもあるという考えほど御米を安堵させるものはない。〈罪〉によって結び付けられた二人は、子供問題についても〈罪〉を共有すべきなのであり、ここに御米が宗助に告白する理由がある。更に言えば、御米は〈罪〉の確認によって子供の問題は勿論、夫婦を結ぶ「絆」をも強固なものにしようとしていたと考えられよう。一方、宗助の側に見れば、この告白は要らざる〈罪〉の確認としか言いようがないものであり、それは告白を終えた御米を鷹揚な態度でなだめる宗助の態度に窺える。

しかし宗助がやり過ぎたかに見えるこの御米の〈罪〉の確認こそは、安井登場のための周到な伏線であった。坂井の弟と共に帰国するといふ忌まわしき〈昔〉／安井の登場によって、〈自然の恵から来る月日という緩和剤の力丈で、漸く落ち付いた〉。(一七の二)だけの宗助の日常性は、もろくも崩れ始める。

此二三年の月日で漸く癒り掛けた創口が、急に疼き始めた。疼くに伴れて熱つて来た。再び創口が裂けて、毒のある風が容赦なく吹き込みさうになった。宗助は一層のこと、万事を御米に打ち

明けて、共に苦しみ分つて貰はうかと思つた。(一七の二)

しかし、宗助は安井の到来を御米には告げなかった。この点について柄谷行人は、(二人の罪悪感<sup>①</sup>は異質である。)とし、(彼女もまた傷を負つて生きてきたのだが、宗助の傷は彼女の知りえないところにある。彼はいわば関係において傷ついたのであり、相手の男(安井)の接近がもたらす不安は、御米を疎外するのである。／このような両者の疎隔は、不可避的なものである。)と指摘する。たしかに宗助が安井から御米を奪つた男であり、御米は奪われた女である事を考慮すると、二人の〈罪〉の内実はその関係の当初から相異なっており、それゆえに違つた罪悪感を醸成していったと考えられよう。

宗助と御米の一生を暗く彩どつた関係は、二人の影を薄くして、幽霊の様な思を何所かに抱かした。彼らは自己の心のある部分に、人に見えない結核性の恐ろしいものが潜んでゐるのを、仄かに自覚しながら、わざと知らぬ顔に互と向き合つて年を過した。(一七の二)(傍線引用者)

米田利昭も(略)御米は、安井を裏切つたことを罪と意識しているだろうか。と述べているように、宗助が安井の消息を御米に告げないのは、そのような〈罪〉意識の懸隔が二人の關係に横たわっているからである。この懸隔を直視しないことで二人の〈和合同

棲」は辛うじて保たれていたと考えられるのである。

そしてそれを裏付けるような記述が、宗助が参禅する場面の中に認められる。安井の到来に脅かされた宗助が、「積極的に人世觀を作り易へ」るため（心の実質が太くなるもの）（一七の五）を求めて参禅した翌日、御米に宛てて手紙を認め、その手紙をポストに投函してから、（略）父母未生以前と、御米と、安井に、脅かされながら、村の中をうろついて帰つた。（一八の七）と語り手が述べている箇所である。宗助が御米にさへ回避的な姿勢を示し、それを「脅かされ」というように語り手が注していることから、御米に参禅の目的を打ち明けることもなく鎌倉に向かった宗助には、この時点で安井を想起させる御米から逃げるということが意識されていたのではないかと推察される。すなわち安井に対する罪悪感が宗助の中で膨れ上がるにしたがつて、その意識は不在の安井よりも眼前の御米に対する忌避の感情を育てたと思われる。似た事例として「こゝろ」の先生がその遺書の中で、「私は妻と顔を合せてゐるうちに、卒然Kに脅かされるのです。つまり妻が中間に立つて、Kと私とを何処迄も結び付けて離さないやうにするのです。」（下五二）と、妻の静と向き合う度に亡友Kを見いだす苦衷を訴えていたことが上げられよう。宗助には、御米を忌避する感情が生まれているのである。宗助は御米と違って、「昔」の「罪」や「運命」を共有しよう

とは決してしないのであり、「罪」によって結びついていた筈の宗助夫婦の関係に生じた懸隔がいよいよ顕在化してきているのである。この意味で「和合同棲」の関係を確認することは到底不可能と思われる。事実帰京した「偶然な姿」（二二の二）の宗助に対し、「御米は如何な場合にも夫の前に忘れなかつた笑顔さへ作り得なかつた。」（同）と語り手は指摘している。さらに末尾に示された春の到来を喜ぶ御米に対して「うん、然し又ぢき冬になるよ」（二三）と応じる宗助の態度には、「和合同棲」の境地からの乖離が見て取れるのである。

「昔」の「罪」ゆえに「道義上切り離す事の出来ない一つの有機体」として結び付けられた宗助と御米ではあるが、その「罪」を御米は子供が出来ない現実と結び付けて宗助と共に生きようとし、宗助は「罪」を回避する方向で生きようとするがゆえに御米から離れて行くのである。この意味で「門」は、かつて「和合同棲」の関係を育んだはずの宗助御米の夫婦関係の亀裂を物語っていたといえようしたがって宗助夫婦の内実が、現在と「昔」とでは相違するものと考えなければならぬわけである。すなわち、「昔」を回想して語る語り手は宗助と御米を一括りにして語ることで、宗助と御米の「和合同棲」の関係を提示している。一方で物語の時間の大部分を占有する現在を語る場合の語り手は、二人の平穩な生活の中に

胚胎した関係の空隙を読者に示しているのである。従来説かれていたような親密な関係だけが物語られていたのでもなければ、関係の解体だけが物語られていたのでもない。読者は、二つの時間軸と二つの語り手が複合する構造を持つ「門」において、同一の夫婦の現在と過去の関係の様態を同時的に認識し、二人の得たものと失つていくものの内実を把握するのである。それはかつて過去の〈罪〉によって結び付いた夫婦が、その〈罪〉によって次第にその関係を変容させていく緊迫した様相を、目の当たりにすることに他ならない。夫婦関係を中心に、人間関係の相克を別扱した後期作品への端緒は、すでに「門」において開かれていたといえよう。

## 注

- ① 畑 有三「門」『国文学』昭和46・4。
- ② 重松泰雄「門」の意図「漱石 その歷程」一九九四・三、おうふう。
- ③ 谷崎潤一郎「門」を評す『新思潮』明治43・9。
- ④ 江藤 淳「門」―罪からの遁走『決定版夏目漱石』一九七四・一一、新潮社。
- ⑤ 内田道雄「門」をめぐって―夏目漱石論（二）『古典と現代』3、一九五八・四。
- ⑥ 西垣 勤「門」『漱石と白樺派』一九九〇・六、有精堂。山本勝正も、『言葉の矛盾を恐れずにいえば、漱石はこの小説において夫婦愛を描くと同時に、夫婦間の断絶をも描いているのである。』として、御米が、宗助との「関係の断絶」を意識している具体的な例として、彼女の、子

供に対する「過去」を挙げることができる。』と述べ、宗助についても「彼は、安井によってもたらされたこのような苦しみを、決して妻の御米には打ち明けないのであり、それは、御米が子供に関する苦しみを宗助に明確には打ち明けなかったという事実より以上に重い意味を持っている。」（漱石の「門」の世界『人文論究』21巻4号。関西学院大学人文学会、昭和46・12）と指摘している。

- ⑦ 石原千秋「〈家〉の不在―「門」論『日本の文学』8、一九九〇・一、二、有精堂。
  - ⑧ 余呉育信「身体としての境界―「門」論『愛知大学国文学』31、平成三・七。
  - ⑨ 前田 愛「山の手の奥」『都市空間の中の文学』一九八二・二二、筑摩書房。
  - ⑩ 吉川豊子「門」『覚書』内田道雄・久保田芳太郎編『作品論夏目漱石』昭和51・9、双文社。
  - ⑪ 牧野陽子「門」のなかの闇『比較文学研究』32、昭和52・11。
  - ⑫ 勝田和学「夏目漱石「門」の方法」小林一郎編『日本文学の心情と理念』平成一・二、明治書院。
  - ⑬ 注⑦に同じ。
  - ⑭ 柄谷行人「門」について『批評とポスト・モダン』一九八五・四、福武書店。
  - ⑮ 米田利昭「異空間へ―「門」―「私の漱石」一九九〇・八、勁草書房。
- 〔付記〕  
「門」本文の引用は、『漱石全集』第六卷（一九九四・五・九、岩波書店）による。また引用に際しては、漢字の旧表記を現行のものに改め、一部を除いてルビを廃した。